



和菓子の日

おいしいお菓子とお茶でくつろぐひととき。現在では広く親しまれている「和菓子の日」ですが、実はこの行事を制定した発案者が榮太樓總本舗の六代目・細田安兵衛と聞いております。

Q 六月十六日に「[和菓子の日](#)」を定めた理由を教えてください。

A 千年以上の歴史と伝統を誇る和菓子業界にふさわしい由来が必要であるとの考えから、長い歴史に根ざした「嘉祥の日」が六月十六日に選ばれました。「嘉祥の儀」や「嘉祥菓子」については、古来から諸説がありますが、最も古いものは平安時代、仁明天皇がご神託に基づいて元号を「承和」から「嘉祥」に改め、疫病除けと健康招福を祈ったことに始まったといわれています。また、嵯峨天皇が東宮となられる前、六月十六日に通貨十六枚で供物を求めて献じたことを吉例とし、即位後もこれが続けられたという説もあります。さらに慶長の頃には、豊臣秀吉が「嘉祥の祝」を恒例行事として行っていたことが記録されており、民間でも「嘉祥喰い」と称して、錢十六文で菓子や餅を十六個求めて食べる風習がありました。このほか、夜に十六歳の振袖から詰袖へと替える「嘉祥縫い」や、六月十六日に採った梅の実で作った梅干しを旅立ちの日を食べると災難を逃れるとされる「嘉祥の梅」などの言い伝えも残っています。このように「嘉祥の祝」は疫を避け、健康招福を願うめでたい行事として歴史の中で受け継がれ、明治時代まで盛んに行われていました。この「嘉祥の日」を現代に復活させたのが「和菓子の日」です。なお「榮太樓物語」には、当時社長であった六代目・細田安兵衛の和菓子の日への想いが記されています。

「私は、和菓子というものを世間にPRするための年間行事に以前から想いを巡らせていました。和菓子の伝統や歴史を考えると、正しい歴史の古事に基づいたものでなければなりません。また和菓子は人々に幸せをもたらす食べ物である、という点も大切な部分です。こんな条件を満たす格好な行事が見つかったのです。それは昭和52年（1977）、私が父の跡を継いで就任した、『山王日枝神社』の責任役員に就任したときに知った、山王祭の一環として六月十六日に催される『山王嘉祥祭』と和菓子との関わり合いのことでした。そこで、全国和菓子協会会長であり、株式会社虎屋の当時の社長で

あった黒川光朝氏に相談したのです。その年の5月21日、「東京ウォーク」と名付けた催事が行われ、黒川氏と私と二人並んで同コースを歩きながら、私が和菓子の日のことを提案しました。」

話を聞いた黒川氏も「それはとても面白い企画だ。自分の処にも確か嘉祥菓子の資料がある筈だから色々調べておこう」と賛同し、両者の意見は一致したと言います。さっそく同年6月中旬、山王祭の行事の中で「嘉祥祭」という神事と和菓子との関連について宮司らと協議し、「嘉祥の儀 和菓子まつり」を実施することが神社側でも正式に決定。同年11月、京都国際会議所で開催された「全国菓子協会創立二十五周年記念大会」において、黒川氏自らが「六月十六日は和菓子の日」とすることを提案し、満場一致で正式に決定されました。

これを受け、翌年の昭和54年（1979）6月16日、全国各地で「第1回和菓子の日」の催事が行われました。以来、今日まで内容は時代とともに変化しながらも各地で広く実施され、マスコミにも取り上げられるなどして、「和菓子の日」は次第に世間に定着していきました。

当社でも毎年6月16日「和菓子の日」に「嘉祥饅頭」を販売しております。ぜひご賞味くださいませ。

2026年5月